第25回フォーラム：子ども虐待予防の真髄に迫る　全体会

「生きる火種」の真の意味

NPOこども福祉研究所　**小出 真由美**

虐待をどう乗り越えるか

普段、私は東京都内にある自治体の子どもの権利をまもる相談機関で相談員として、主に小学生から18歳までの子ども自身から「いじめ」や「体罰」そして「虐待」などの相談を受けています。子ども自身は「嫌だった」「どうしたらいいのか」と相談してくれます。それが「いじめ」「体罰」「虐待」であるとは相談しません。渦中にあるから言えないというのもあると思いますが、そういう権利が侵害されていると他者に伝えることを、子ども自身が「いけないこと」「うしろめたいこと」と思っているからかもしれません。誰にも相談できずに抱え込んできたという思いとともに吐き出しにきてくれます。そのときには必ず「よく相談してくれたね、ありがとう」と子どもが相談してくれた勇気や思いを支えます。その後、どうしたらいいかを子どもとともにおとなとして考えていきます。

今回、KKIのフォーラムに参加しようと思ったのは、これらの仕事で子どもたちとともにどのようにして「虐待」を乗り越えていくのがよいのかということをあらためて考えたいと思ったことと、以前一度、服部先生のお話をお聞きしたことがあり、生きる根源を教えていただけたと感じたため、再度どうしても聞きたくてお伺いしました。

人生は三幕のドラマ

まず、服部先生からお話があったのは、このKKIがどのようにしてでき上がったかというお話でした。大阪レポートと兵庫レポートを通して、服部先生と原田先生が「親が子育てをしていくために何が必要か」というのを原田先生が具現化したのが子育てサークルだったそうです。今や子育てをするのに当たり前のように地域にある子育てサークルという流れが、そういう湧き水から派生したのだとわかりました。

たくさんの人たちがつながりながら子育てをしていくことのメリットはどこにあるかということを、服部先生ご自身の幼少期からおうかがいできました。服部先生の幼少期は公民館にお住まいで地域の人たちが集まる中で大変かわいがられながら育まれた話や、おうちのなかでは小さな炭から火おこしを上手におこなう役割を担う小学校時代に「火おこしさっちゃん」という愛称で家族の一員としてお過ごしだったそうです。ひとりの子どもを多くのおとなが支えていければ、親の子育て負担は軽減されるメリットがあると実感しました。

そういう幼少期が服部先生を支えているのだということを、エリクソンの発達過程に基づいてお話してくださいました。「人生は三幕のドラマ」

として、「第一幕」は出生から10歳～12歳頃の身体的変化を迎えるまでです。その時の舞台は「母港」つまり、陸上にいて、信頼の絆「基本的信頼感」を得る時期です。親や教師などに出会い、依存しながら獲得していきます。これがＢＰプログラム（以下ＢＰ）でも大切にされている「安定根とのことです。ついで、「第二幕」は身体的変化の後から社会的変化を迎える10代いわゆる思春期です。その時の舞台は「船出」です。母港を出ていくものの、すぐに戻ってこられる範囲で船を走らせています。身体的変化である二次性徴は母子が一体ではなくなるという分離をも意味しています。親から離れたい思いとそこに存在する孤独が思春期を「嵐の時」と言わしめる理由だそうです同時に仲間体験や社会参加を通して、自分の中にある「生きる火種」を見つける時期です。その火種は、「第一幕」のはじめ、「出生」のときに誰もが持ち得ているもので、それが何だったか、どこにいったか、混沌とするのが思春期であるとのことです。その思春期を経て、「第三幕」は「大人の時間」となっていきます。舞台は「本航海」いわゆる成人式を経てその旅が大海原でこれから本格的に始まる…というものです。確かに、大海原へ航海していくことになると大荒れの日も凪の日もあると思います。それが人生の日々であり、おぼれることや転覆することがあっても、生き抜くためには１人きりで航海せず、「社会参加」や「自立と共存」していかなければならないと思います。

自立力と共存力

そこで、服部先生が説明してくださったのは、おとなとして獲得をしなければならない力として「自立力：孤独にたえてひとりで生きる力」や「共存力：人とのかかわりの中で生きる力」があるとのことです。自立力は、自分が自分をひとりで生かすことができる力であり、それが出てくるのが「自分で」と言い出す２歳児の反抗期のこと

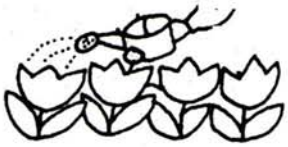
「子育てできてるよ」という支援

です。誰を信じることができなくても、自分は信じなければ生きていけないため、自分をまもることを持ち続ける力とも言えます。また共存力は、人はひとりでは生きていけないため他者を信じ共感し、かかわりながら生きていく力と、自立力と真逆の力です。ただ、その両方の力がないと航海を進めることができず、大人の時間を過ごすことが難しいのだということは、今、自分自身が生きていても納得のいくお話でした。

服部先生は精神科医として臨床の現場で、10代の思春期に「誰ともかかわることをしたくない」という少年少女たちへ「何もできないかもしれないけれど、見ててあげるから歩いてごらん」と伝えているというお話がありました。それが「思春期の嵐の恵み：「生きる火種」を掘り起こす」作業のお手伝いなのだとわかりました。先生のもとで、少年少女たちは本当に何が一番自分にとって大切なのかというのを見極める力を見つけていくそうです。その話が私にとって一番、心を揺さぶられました。私自身もこの１年、思春期の子どもたちに出会いながら、「いつでも話を聞くよ。ひとりで抱え込まないで、一緒に考えよう」と言ってきました。それだけではいけないのだと反省させられました。一緒に考えることも共存力を高めるには必要かもしれないけれど、相談員としての私には「何もできないかもしれないけれど」という自立力を高めるための手助けとともに「生きる火種」が必ずあるから見つけてもらいたいとそっと寄り添わなければいけないのだと思いました。

「子育てできてるよ」という支援

つづいて、原田先生からＢＰの実践報告とそれがどのように児童虐待防止につながっていくのかという説明をしてくださいました。



ＢＰはプログラムの中で「親が親として成長することを支援する」ことが特徴と話されていました。大阪レポートで子育ての経験や赤ちゃんと触れ合った経験が無いという親世代が多かったというのは、以前のこの KKIのフォーラムでお聞きしました。第一子を出産した母親に、ＢＰを通して赤ちゃんを知りながら親になっていくことをサポートしていきます。そのサポートによって、母親たちが赤ちゃんの育ちを知ることで「安定根」を、育てていくことができる自信を得ながら親になれます。親になることが向いていないと感じている母親や、参加が中断してしまった母親たちは虐待のリスクが高いということになります。ＢＰを通してそのような虐待リスク早期発見することができたり、適切な支援につなぐことが可能になることで虐待予防につながるということでした。

私自身はこれまで虐待対応のワーカーの経験もあったため、ＢＰは本当に素晴らしい取り組みだと感じました。これまでの虐待施策はどうしても発見してからの支援が多く、対応が後手に回ることも残念ながら多かったようにも思われます。そして、その後手に回る対応を防ぐために妊娠期からの特定妊婦対応などもしてきたものの、出産後にその特定妊婦への支援の手が切れてしまうなどの課題がありました。ＢＰは特定妊婦に限らず、多くの母親が親になることをサポートするため、妊婦の時には特定妊婦に当てはまらなかった虐待リスクの高い母親たちも発見することができることが本当に子どもも親も救えるという素晴らしい取り組みだと思います。誰もが子育てという未体験に追い込まれて、虐待をしてしまうかもしれないという視点に立てば、それを救い出していくためにも「子育てできてるよ」と支援されていくことが何よりもの虐待予防だと思うのです。

根底にある「生きる力の火種」

なぜ「子育てできてるよ」という言葉が必要なのかは、私は相談員として絶対に必要だと思っていたものの、理由を説明できませんでした。その理由を原田先生がわかりやすく説明してくださいました。それは、今、子育てをしている世代のほとんどが「親自身の自己実現」と「親役割を果たすこと」とを追い求めていて、そのバランスを考慮した支援が必要とのことでした。つまりは、親たちが「こんな子育てでいいのだろうか」と自信がないだけでなく「子育てが自分の成長にもつながっていく」という思いを頭で理解していても「それでいい」と思えないというところにあると感じました。ＢＰで他者とつながることで「子育てできてるよ」と言われたり、体験を通して、見て感じて、「あ、これでいいんだ」と納得がいくようになるのだと思います。

それが私の中で服部先生のお話されていた「大人の時間」の「自立力と共存力」のバランスにつながりました。親たちは共存の中から自立を得つつ、自立した関係だからこそ共存できていくのだと思いました。そして、その根底にあるのは「安定根」であるところの「生きる力の火種」なのだと思います。それをはぐくんでいくことが「親役割を果たすこと」だと親自身が自らの生きている世界と子育てとをつなぎながら可能になっていくのだと感じました。

自分が育ってきたようにしか子どもは育てられないのではなく、子どもを育てることは誰にでもできることで、どうやって育てたらいいかを多くの人とかかわりながら学べば安心して安全に子どもを育てられるのだと改めてＢＰの魅力を感じました。「安心」と「安全」はＮＰ(Nobody's Perfect)の基本でもあります。支援の基本でもあると思っています。だからこそＢＰがすべての必要とする母親たちに届くことを願っています。